

2025年度
関西学院大学ロースクール
C日程

一般入試（法学未修者）
特性評価型入試（法学未修者）

論文問題

《10:00～11:30》

○開始の指示があるまで内容を見てはいけません。

【論文問題】

次の文章（以下「本文」という。）を読んで、〔設問1〕および〔設問2〕に答えなさい。

〔設問1〕

筆者は利他について、なぜ下線①のように考えているのか、またそれを克服するために私たちはどうあるべきだと考えているかという観点から、本文全体の趣旨を要約しなさい（600字程度）。

〔設問2〕

筆者が下線②において、「利他」をある種の「うつわ」に例えているのはなぜか、本文の趣旨を踏まえて簡潔にその理由を説明しなさい（300字程度）。

問題文

<前略>

①特定の目的に向けて他者をコントロールすること。私は、これが利他の最大の敵なのではないかと思っています。

冒頭で、私は「利他ぎらい」から研究を出発したとお話ししました。なぜそこまで利他に警戒心を抱いていたのかというと、これまでの研究のなかで、他者のために何かよいことをしようとする思いが、しばしば、その他者をコントロールし、支配することにつながると感じていたからです。善意が、むしろ壁になるのです。

たとえば、全盲になって10年以上になる西島玲那さんは、19歳のときに失明して以来、自分の生活が「毎日とはバスツアーに乗っている感じ」になってしまったと話します。

「ここはコンビニですよ」。「ちょっと段差がありますよ」。どこに出かけるにも、周りにいる晴眼者が、まるでバスガイドのように、言葉でことこまかに教えてくれます。それはたしかにありがたいのですが、すべてを先回りして言葉にされてしまうと、自分の聴覚や触覚を使って自分なりに世界を感じるができなくなってしまいます。たまに出かける観光だったら人に説明してもらうのもいいかもしれない。けれど、それが毎日だったらどうでしょう。

「障害者を演じなきゃいけない窮屈さがある」と彼女は言います。晴眼者が障害のある人を助けたいという思いそのものは、すばらしいものです。けれども、それがしばしば「善意の押しつけ」という形をとってしまう。障害者が、健常者の思う「正義」を実行するための道具にさせられてしまうのです。

若年性アルツハイマー型認知症当事者の丹野智文さんも、私によるインタビューのなかで、同じようなことを話しています。

助けてって言ってないのに助ける人が多いから、イライラするんじゃないかな。家族の会に行っても、家族が当事者のお弁当を持ってきてあげて、ふたを開けてあげ、割り箸を割って、はい食べなさい、というのが当たり前だからね。「それ、おかしくない？できるのになぜそこまでの？」って聞いたら、「やさしいからでしょ」って。「でもこれは本人の自立を奪ってない？」って言ったら、一回怒られたよ。でもぼくは言い続けるよ。だってこれをずっとやられたら、本人はどんどんできなくなっちゃう。

認知症の当事者が怒りっぽいのは、周りの人が助けすぎるからなんじゃないか、と丹野さんは言います。何かを自分でやろうと思うと、先回りしてぱっとサポートが入る。お弁当を食べるときにも、割り箸をぱっと割ってくれるといったように、やって

くれることがむしろ本人たちの自立を奪っている。病気になったことで失敗が許されなくなり、挑戦ができなくなり、自己肯定感が下がっていく。丹野さんは、周りの人のやさしさが、当事者を追い込んでいると言います。

ここに圧倒的に欠けているのは、他者に対する信頼です。目が見えなかったり、認知症があったりと、自分と違う世界を生きている人に対して、その力を信じ、任せること。やさしさからつい先回りしてしまうのは、その人を信じていないことの裏返しだともいえます。

社会心理学が専門の山岸俊男は、信頼と安心はまったく別のものだと論じています。どちらも似た言葉のように思えますが、ある一点において、ふたつはまったく逆のベクトルを向いているのです。

その一点とは「不確実性」に開かれているか、閉じているか。山岸は『安心社会から信頼社会へ』のなかで、その違いをこんなふうに語っています。

信頼は、社会的な不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までも含めた意味での）人間性のゆえに、相手が自分に対してひどい行動はとらないだろうと考えることです。これに対して安心は、そもそもそのような社会的な不確実性が存在していないと感じることを意味します。

安心は、相手が想定外の行動をとる可能性を意識していない状態です。要するに、相手の行動が自分のコントロール下に置かれていると感じている。

それに対して、信頼とは、相手が想定外の行動をとるかもしれないこと、それによって自分が不利益を被るかもしれないことを前提としています。つまり「社会的な不確実性」が存在する。にもかかわらず、それでもなお、相手はひどい行動をとらないだろうと信じること。これが信頼です。

つまり信頼するとき、人は相手の自律性を尊重し、支配するのではなくゆだねているのです。これがないと、ついつい自分の価値観を押しつけてしまい、結果的に相手のためにならない、というすれ違いが起こる。相手の力を信じることは、利他にとって絶対的に必要なことです。

私が出産直後に数字ばかり気にしてしまい、うまく授乳できなかったのも、赤ん坊の力を信じられていなかったからです。

もちろん、安心の追求は重要です。問題は、安心の追求には終わりが無いことです。100%の安心はありえない。

信頼はリスクを意識しているのに大丈夫だと思う点で、不合理な感情だと思われるかもしれません。しかし、この安心の終わりのなさを考えるならば、むしろ、「ここから先は人を信じよう」という判断をしたほうが、合理的であるということができま

す。

利他的な行動には、本質的に、「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」という、「私の思い」が含まれています。

重要なのは、それが「私の思い」でしかないことです。

思いは思い込みです。そう願うことは自由ですが、相手が実際に同じように思っているかどうかは分からない。「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」が「これをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」に変わり、さらには「相手は喜ぶべきだ」になるとき、利他の心は、容易に相手を支配することにつながってしまいます。

つまり、利他の大原則は、「自分の行為の結果はコントロールできない」ということなのではないかと思えます。やってみて、相手が実際にどう思うかは分からない。分からないけど、それでもやってみる。この不確実性を意識していない利他は、押しつけであり、ひどい場合には暴力になります。

「自分の行為の結果はコントロールできない」とは、別の言い方をすれば、「見返りは期待できない」ということです。「自分がこれをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」という押しつけが始まるとき、人は利他を自己犠牲ととらえており、その見返りを相手に求めていることになります。

私たちのなかにもつい芽生えてしまいがちな、見返りを求める心。先述のハリファックスは、警鐘を鳴らします。「自分自身を、他者を助け問題を解決する救済者と見なすと、気づかぬうちに権力志向、うぬぼれ、自己陶醉へと傾きかねません」

(『Compassion』)。

アタリの言う合理的排他主義や、「情けは人のためならず」の発想は、他人に利することがめぐりめぐって自分にかえってくると考える点で、他者の支配につながる危険をはらんでいます。ポイントはおそらく、「めぐりめぐって」というところでしよう。めぐりめぐっていく過程で、私の「思い」が「予測できなさ」に吸収されるならば、むしろそれは他者を支配しないための想像力を用意してくれているようにも思えます。

どうなるか分からないけど、それでもやってみる。ブレイディみかこは、コロナ禍の英国ブライトンで彼女が目にした光景について語っています(ブレイディみかこ×栗原康「コロナ禍と“クソどうでもいい仕事”について」、「文學界」2020年10月号)。

ブレイディによれば、町がロックダウンしているさなか、一人暮らしのお年寄りや自主隔離に入った人に食料品を届けるネットワークをつくるために、自分の連絡先を書いた手づくりのチラシを自宅の壁に貼ったり、隣人のポストに入れて回ったりしていた人がいたそうです。普通ならば「個人情報が悪用されるのではないかなどと警

戒するところですが、そうではなく、とりあえずできることをやろうと動き出した人がいた。

ブレイディは、これは一種のアナキズムだと言います。アナキズムというところと一切合切破壊するというイメージがありますが、政府などの上からのコントロールが働いていない状況下で、相互扶助のために立ち上がるという側面もある。コロナ禍において、とりあえず自分にできることをしようと立ち上がった人は、日本においても多かったように思います。

レベッカ・ソルニットの「災害ユートピア」という言葉があります。これは、地震や洪水など危機に見舞われた状況のなかで、人々が利己的になるどころか、むしろ見知らぬ人のために行動するユートピア的な状況を指した言葉です。

このようなことが起こるひとつのポイントは、非常時の混乱した状況のなかで、平常時のシステムが機能不全になり、さらに状況が刻々と変化するなかで、自分の行為の結果が予測できなくなることにあるのではないかと思います。どうなるか分からないけど、それでもやってみる。混乱のなかでこそ純粋な利他が生まれるようにみえる背景には、この「読めなさ」がありそうです。

他方で平常時は、こうした災害時に比べると、行為の結果が予測しやすいものになります。少なくとも、平時の私たちは、自分の行為の結果は予測できるという前提で生きています。

でも、だからこそ「こうだろう」が「こうであるはずだ」に変わりやすい。実際には相手は別のことを思っているかもしれないし、いまは相手のためになっても10年後、20年後にはそうではないかもしれない。

にもかかわらず、どうしても私たちは「予測できる」という前提で相手と関わってしまいがちです。「思い」が「支配」になりやすいのです。利他的な行動をとるときには、とくにそのことに気をつける必要があります。

そのためにできることは、相手の言葉や反応に対して、真摯に耳を傾け、「聞く」こと以外にないでしょう。知ったつもりにならないこと。自分との違いを意識すること。利他とは、私たちが思うよりも、もっとずっと受け身なことなのかもしれません。

さきほど、信頼は、相手が想定外の行動をとるかもしれないという前提に立っている、と指摘しました。「聞く」とは、この想定できていなかった相手の行動が秘めている、積極的な可能性を引き出すことでもあります。「思っていたのと違った」ではなく「そんなやり方もあるのか」と、むしろこちらの評価軸がずれるような経験。

他者の潜在的な可能性に耳を傾けることである、という意味で、利他の本質は他者をケアすることなのではないか、と私は考えています。

ただし、この場合のケアとは、必ずしも「介助」や「介護」のような特殊な行為である必要はありません。むしろ、「こちらには見えていない部分がこの人にはあるん

だ」という距離と敬意を持って他者を気づかうこと、という意味でのケアです。耳を傾け、そして拾うことです。

ケアが他者への気づかいであるかぎり、そこは必ず、意外性があります。自分の計画どおりに進む利他は押しつけに傾きがちですが、ケアとしての利他は、大小さまざまなき計画外の出来事へと開かれている。この意味で、よき利他には、必ずこの「他者の発見」があります。

さらに考えを進めてみるならば、よき利他には必ず「自分が変わる事」が含まれている、ということになるでしょう。相手と関わる前と関わった後で自分がまったく変わっていなければ、その利他は一方的である可能性が高い。「他者の発見」は「自分の変化」の裏返しにほかなりません。

他者の潜在的可能性に耳を傾け、そして想定外の反応に出会ったときの、「他者を発見した」という感触。「宅老所よりあい」の村瀬孝生さんは、お年寄りたちと関わるなかで、「計画倒れをどこか喜ぶ」態度が重要だと言います。

たとえば「10時までに全員入浴」という計画を立てたとします。けれども、それを実行することを優先してしまうと、それがまるで「納期」のようになってしまっ、お年寄りを物のように扱うことになる。お年寄りは、そんなビジネスの世界には生きていません。計画を立てないわけではないけれど、計画どおりにいかないことにヒントがあるのだと村瀬さんは言います。

とくに「ぼけ」のあるお年寄りはこちらの計画に全く乗ってくださらないし、それを真面目に乗せようとすればするほど、非常に強い^{あらが}抗いを受けます。その抗いが、僕たち支援する側と対等な形で決着すればいいのですが、最終的には僕らが勝ってしまう。下手をするとお年寄りの人格が崩壊するようなことになります。だから計画倒れをどこか喜ぶところがないと。計画が倒れたときに本人が一番イキイキしていることがあるんです。

(伊藤亜紗、村瀬孝生「ぼけと利他(1)」、「みんなのミシマガジン」2020年8月13日)

あるいは村瀬さんは、「車に乗ってください」と言っても乗ってくれないお爺^{じい}さんのことを語っています。家に帰りたいのにあるいは施設に行きたいのに、車に乗ってくれないお爺さん。

ところがそのお爺さんは、「そろそろ船が出ますよ」と言うと乗ってくれることが分かったのだそうです。お爺さんは太平洋戦争の敗北を北朝鮮で迎えた方だそうです。すでにソ連軍の支配下にあった港には、日本の船が邦人救出のために寄港することができませんでした。当時、若かりしお爺さんは同朋と闇舟を手配して命からがら脱出

してきたのだそうです。

利他についてこのように考えていくと、ひとつのイメージが浮かびます。それは、②利他とは「うつわ」のようなものではないか、ということです。相手のために何かをしているときであっても、自分で立てた計画に固執せず、常に相手が入り込めるような余白を持っていること。それは同時に、自分が変わる可能性としての余白でもあるでしょう。この何もない余白が利他であるとするならば、それはまさにさまざまな料理や品物をうけとめ、その可能性を引き出すうつわのようです。

<以下略>

出典：

伊藤亜紗編『「利他」とは何か』（集英社新書、2021年）より抜粋。

出題との関係で必要な補足、省略、変更を施している。なお、<前略>および<以下略>は出題者による。

2025年度入学試験 出題趣旨・解説・講評

【C日程：論文】

出典 伊藤亜紗「「うつわ」的利他—ケアの現場から」伊藤亜紗編『「利他」とは何か』
第1章

次の文章（以下「本文」という）を読んで、〔設問1〕および〔設問2〕に答えなさい。

出題意図

コロナ禍を受けて、世界のつながりと社会における相互扶助の重要性がクローズアップされた。そのような背景のもと、東京工業大学「未来の人類研究センター」による共同研究の成果が本書である。

設問1は、文章全体の大意をコンパクトにまとめる要約問題である。

要約問題は、法律家に必要な資質・能力を測定することを目的として、①論理的な文章への理解力、②論理の骨子を抜き出す分析力・論理力、③コンパクトにまとめる文章力を試そうとしている。

本問の問いは、単に要約せよ、ではなく、要約の方向性が冒頭の2行に示されている。したがって、それに応答する形で要約することが求められている。そうすると、（ア）「利他に含まれる危険性」と（イ）「その克服の方向性」という2つの柱をもとに、文章の流れに沿って、過不足なくバランスよくまとめることが求められることになる。

その際、キーワードを抜き出すことが要約のポイントとなる。

利他に含まれる危険性については、①他者支配（押し付け、見返りの要求）、②信頼の欠如、③行為の予測と安心などがキーワードとしてあげられよう。

それを克服する方向性としては、③他者をコントロールできないことを原則とすること、④ケア（相手の言葉に耳を傾けること、配慮）を本質とすること、⑤相手の予想外の行為を受け止める余白とその結果の自己の変化の可能性を指摘すべきであろう。

（ア）と（イ）の2つの要素を含む答案が大多数を占めたが、段落として明示的に2つに分けた解答は必ずしも多くはなかった。問いが2つの観点から要約しなさい、としているのだから、できるだけ問いに沿った素直な解答を心がけて頂きたい。

また、全体を要約することは数か所の文章を抜き出して「コピーすること」とは異なる。出題文の文章のいくつかをコピーしてつないでいる解答の評価は低い。そのような解答は、例えば（ア）に関わる分量が多くなって、（イ）のケアの本質に触れた部

分が薄くなるなどバランスを失する傾向があった。また、結局、文章の羅列に終わっており、利他のどこに問題があり、それをどう克服しようとしているのか、という全体の論理の流れが不明確になる傾向があった。

要約問題だからといって、文章を丸写しするのではなく、自分で文意を理解し、消化したうえで、キーワード（これは変えてはいけない）を軸に自分なりの表現に落とし込んで短くまとめることが求められている。

設問2は「ケアとしての利他」と「対象を受け止める余白の大きな器」とを対比させて本質的な類似点を端的に指摘することを求める、理解力と論理的な文章を書く力を試す問題である。

AをBに例えた理由は何か、という問いであるから、その解答は、①AはCである、②BはCである、③両者にはcという共通項があるからAをBに例えている、といった文書の流れ・構造にすることが望ましい。

その際、筆者がたとえている「器」のイメージを絞り込むことが重要である。器と言われても、日常的に使うお皿から、高級で華やかな花瓶や、骨とう品の茶器まで人によって持つイメージは異なる。筆者が例えに使っている「器」は、あくまで受け身で、主役を引き立て、その結果器も映えるような、「(汎用性の)大きな」器である。

解答の中には設問1に引きずられて設問1の解答をもう一度引き写したような、利他の本質の説明に大部分を割くものも見られたが、設問2では上述したように筆者が例える「器」をきちんと定義ないし説明する必要がある。300字と分量が限られているからこそ、利他と器の両者を比較するうえでのバランスが求められる。

論文問題は、設問の問いに沿って素直に解答しているか（これができない解答者が一定数いる）、解答が論理的な構造をしっかりと持っているか（その意味では可能な範囲では改行を使った段落構成も心掛けてほしい。字数制限を意識しすぎて最初から最後までダラダラと続けている解答も多いが、論理の展開が不明確になりがちである）、筆者の論旨を理解したうえで不可欠なキーワードを展開しているか（1つの点にこだわって他の重要な用語を落としている解答が多い）、解答に求められるバランスを保っているか（字数が足りなくなって後半の重要部分が薄くなる傾向がある）などをチェックしていることを理解されたい。

設問1

筆者は利他について、なぜ傍線①のように考えているのか、またそれを克服するために私たちはどうあるべきだと考えているかという観点から、本文全体の趣旨を要約しなさい（600字程度）。

（解答例）

他者に対して何かよいことをしようとする善意こそ、しばしば他者をコントロールし、支配することにつながる契機を含んでいる。実際、周囲のやさしさに追い込まれると述べる当事者がいる。そこでは相手が予想外の行動をとりうる可能性を意識せず、相手をコントロールすることで自己の安心を追求してしまっている。相手の自律性を尊重して決定を委ねる信頼の欠如が他者の支配につながるのである。

また、利他的な行動に含まれる相手の「利になるだろう」という思いは、「喜ぶはずだ」から「喜ぶべきだ」に容易に転化し、自己犠牲に対して見合うための当然の見返りを相手に求めてしまう。

利他を他者支配につなげないためには、自分の行為の結果はコントロールできず、相手の反応は予測できないという原則に立つ必要がある。特に予測の難しさから純粋な利他が生まれやすい災害時に比べて、行為の結果が予測しやすい平常時には、思いが支配につながりやすいからこそ、相手の言葉や反応に対して、真摯に耳を傾け聞くことが求められる。

結局、他者の潜在的な可能性に距離と敬意をもって気づかうこと、つまりケアが利他の本質である。ケアの関係性においては相手との関わりの中での「他者の発見」が「自己の変化」につながるような余白を持つべきである。その意味で相手があるがままに受け止める「うつわ」的利他を私たちは目指すべきである。(575字)

設問 2

筆者が傍線②において、「利他」をある種の「うつわ」に例えている理由を本文の趣旨を踏まえて簡潔に説明しなさい(300字程度)。

(解答例)

筆者は、相手を信頼し、相手が想定外の行為をとる可能性を受け入れ、相手に対して真摯に耳を傾け、話を聞くことを含む他者への気づかいとしてのケアが利他につながるとする。また、良き利他には、相手の可能性の発見を通じて自己の変化を促す余白があるとする。さらに、条件なしに相手の存在だけを理由として享ける世話がケアだとする考えに共感している。

他方、ある種のうつわは、多様な料理や品物をありのままを受け入れながら、料理等の可能性を引き出し生かすことができ、そのことを通じて器自体の印象も変えることがある。

筆者のたとえば、両者の受動性、対象を活かす機能、変化の相互性における共通性に依拠している。(292字)。